

# CAGLIERO

カリエロ11 サレジオ会  
宣教ニュース

N.101 - 2017年5月



サレジオ会宣教部門によるサレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信



2017年3月末、コチャバンバ（ボリビア）：総長はインターアメリカ地域のTeam Visitを主催しました。そのすべての行事や会合の中心に、心をとらえるルイジ・ボツラ神父の顔が映し出されていました。ボツラ神父の愛したアチュアルの明るい色で塗られたその顔、長い白いひげが威厳を加える顔です。この5月、ペルーの管区長は伝統的なやり方で巡礼を率います。ボツラ神父の亡骸をたずさえ、野を越え川を越えて行くのです。この尊敬を集める宣教師は、リマからクンツァに、愛した土地と人々のもとに、ドン・ボスコの子として「すべての人にとってすべて」（1コリント9・22）となった場所へ帰るのです。

このボリビア訪問中、私はサレジオ会員に伝えたいと思います。「私たちは愛する宣教師の兄弟、ドン・ルイジを再び埋葬します。しかし、私たちの共同体、私たちの管区の宣教精神を埋葬することのないように注意を払うのです！」このマリアの月に、私たちは熱烈で信頼のこもったこの祈りを、ヴァルドッコのキリスト者の扶けのみ手の中に置きます。「愛するお母さん、私たちを助けてください、『宣教する力を奪われないように』（『福音の喜び』109）」。

宣教顧問

ギジェルモ・バサニェス神父

## ……絶えず宣教する状態にあること

「宣教促進担当者マニュアル（DIAM）」の新しい版が出ます。現在、印刷に入っているところです。その中から、私たちの共同体に役立つ言葉を紹介しましょう：

「今日、教皇フランシスコは私たちを導いています：私たちのカリスマの宣教の次元を生きてということは、絶えず宣教する状態でサレジオ会員として生きること、『福音の光を必要とするあらゆる辺縁の場』へ絶えず赴こうとすることを意味します。私たちはこのようにして、イエスとイエスの民のための情熱を生きたものとして保つのです。このことが、司牧的無関心、否定的感情、墓場の心理をのりこえさせてくれます。宣教する心は、『キリストを知りキリストの教会の一員であることの内的喜びに基づく、キリスト者であることの喜び』を再発見します。宣教を選ぶことから『福音を告げる喜び』が生まれます。『信仰における疲れ』と使徒的ダイナミズムの喪失をのりこえさせるのは、この喜びです。」



「他方、すべてのサレジオ会員が生きるべきこの宣教精神は、宣教師となる特別な召命を与えられたサレジオ会員がいることを除外せず、実にそれを包含するので、キリストを知らない人たち、あるいはキリストを捨てた人たちの中で（ad gentesすべての人へ）、自分の国を出て（ad exteros）、生涯をかけた献身による（ad vitam）宣教師の道です。」



愛する母よ、私たちを助けてください。

「宣教する力を奪われないように」（『福音の喜び』109）

# 幸せを人と分かち合うこと!



## 宣

教師としての私の召命は、サレジオ会員として、司祭としての召命の結果、その延長線にあります。十代のころに、宣教師その人を通して、あるいは読み物を通して出会った宣教師たちのあかしは、まさに心に響く「声」でした。教会の地平の広大さを私に理解させてくれました。世の中のパン種としての教会のアイデンティティーに気づかせてくれました。プロジェクト・アフリカが立ち上げられたことは、私にとってそれを具体化させる機会になりました。私の動機の一つは、神の子としての尊厳をもって生きることから来る幸せを人々と分かち合うのを可能にするからということでした。神は私たちの父です(そのことによる尊厳は、あらゆる人権を包括し、意味を与えます)。

思い起こせば、40歳でイタリアからサハラ以南のアフリカへ赴く際に支払わなければならなかった代償、全く異なる世界でのコミュニケーション、人々との関係を築くことの難しさがありました。言葉の問題だけでも大変でした……それ以上に、生きること、死ぬことに対する新たなものの見方を理解し受け入れることはどれほど大変だったことか。社会生活における高齢者、大人、若者それぞれの役割や重要性に適応しなければなりません。次の世代の教育のために皆と協力して働く方法やシステムを見いだす必要がありました。まだまだ学ぶべきことのある無知な人間として自分を受け入れなければなりません。……自分自身に忍耐し、何をすべきか、どのようにすべきか理解するために十分な時間を取らなければなりません。

しかしそのことによって、ミッションが私に求めているのは、何ができるかということではなく、人との関わりにどれほど愛をこめられるかということだと理解を助けられました。私の宣教師としての生活を本当にたくさんの喜びで満たしてくださった主に感謝しなければなりません。68年の人生の体験をすべて振り返って見ると、宣教師の召命によって与えられたものを、自分では計画することも、望むこともできなかったと言わねばなりません。これほど広い地平にたどり着けるとは、これほど多くの民族、さまざまな文化の人々と人生を分かち合えるとは、夢にも思いませんでした。宣教師に呼ばれたことによって、はじめてこれほど多様な環境や文化の中で司祭の奉仕職を果たすことができました。

私が働いたミッションは、さらなる喜びをもたらしてくれました。それは、子どもたちが人生で成功するのを見る両親の幸せ、子どもたちが受け取った価値を生きるのを見る両親の満足に似ています。私の出身のイタリア・アドリア管区は、オニツツアに宣教事業を開設するために私を派遣しました。私は最初の22年間、そこで働きました。この宣教事業はすでに40人のサレジオ会員を生み出し、そのうち2人は宣教師Mission ad gentesとして志願することを総長に表明しました。オニツツアには、ナイジェリア初のドン・ボスコ同窓会のグループが組織されています。最初のアフリカ人VDB会員が、オニツツアから生まれています……

宣教師は主が私たちに語られたことを確かなものとして歩みます：「私はいつもあなたがたと共にいる……」。この世のために命、魂、喜びとなりたいと望まれる方に協力するよう呼ばれていることを、宣教師は知っています。宣教師の召命は、その方をインマヌエル、「私たちと共におられる神」とすることなのです。

イタリア出身、ナイジェリアへの宣教師  
ニコラ・チャラピカ神父



## サレジオの宣教の聖性のあかし

サレジオ会列聖申請人 ピエルルイジ・カメローニ神父

妻であり、6人の子どもの母であった最初のサレジアニ・コオペラトリー会員、列福調査の始まった尊者ドロテア・チョピテア(1816-1891)は、ドン・ボスコが「母・マドレ」と呼んだ数少ない一人でした。ドロテアは実にすべての人の母でした。助けが必要なところどこへでも、いつでも行く用意がありました。この「神のいつくしみを配る人」は、当時のバルセロナでほかに並ぶ人のいないほど多くの財産をささげました。尊者の価値のものさしでいちばんに優先されるのは貧しい人への愛でした：「私がまっさきに考えるのは、貧しい人々のことであるでしょう。」



## サレジオ会の宣教の意向

### アフリカのサレジオ会員のために

いつくしみ、正義、平和の預言者として、  
愛の社会的次元を若者に教育することができますように。

アフリカでは、多くの国が深刻な社会問題に苦しんでいます。民族対立、政治の腐敗、政治勢力の急進化、すべての人の機会均等や表現の自由の欠如などの問題です。私たちは教育と福音宣教の取り組みの一環として、信仰の歩みを若者に提示します。その歩みは、それぞれの置かれた状況で、より正義のある兄弟愛に基づいた社会を建設する人、和解と平和の信頼に足るあかし人として、勇気ある市民となるよう若者たちを導きます。

